

強烈な毒のイラモ

水族館へ行こう!

京都大学白浜水族館

59

久保田 信



イラモ(苔藻)は姿形から海藻の仲間のように思われがちだが、実はミスクラゲやアカクラゲ、タコクラゲ、エチゼンクラゲなど、と違って高速で毒針が飛び出して相手の体に突き刺さる。刺胞を満

どの大型クラゲの仲間である。触手にたくさん刺胞と毒針を持ち、生き物との接触が刺激となつて高速で毒針が飛び出して相手の体に突き刺さる。刺胞を満

たす毒成分を瞬間的に注射するのだ。わたしたちでもうっかり触れることがあり、その時は激痛が走り、

△まるで海藻のようなイラモ(水槽番号228)

海藻のような風変わり動物

やけどのように腫れ上がった水膨れになる。沖縄地方では入院した例もあるほどだ。

ところで、イラモが世界に知られた歴史は、京都大学瀬戸臨海実験所の始まるころにさかのぼる。瀬戸の住民の方々から寄せられた貴重な情報をもとに、初代所長の駒井卓先生が1936年に新種として記載したのである。実験所年報のロゴマークになっている由縁である。

増え、あちからちから芽を出してつながらたまま離れず、目に見えるほどの大きさになってくる。硬いキチン質の鞘(さや)を分泌し、柔らかい個虫を保護しているのも本種の特徴である。

黒潮の影響を受ける田辺湾とその周辺の浅海には数多く生息している。直径十数センチほど、人間のにぎり拳ぐらいの大きさになるので見つけやすい。昨今の地球温暖化で、南方系の本種はさらに北へと生息域を広げられるかもしれないので要注意である。

直徑わずか1センチほどのコスモスの花のようなクラゲをつくって有性生殖もする。クラゲが泳ぎだした時点ですでに成熟しており、雌は卵を産み、雄は精子を海中に放出する。役目を果たした親クラゲはすぐに死んでしまう。とても短命な存在なのである。

イラモは海底で付着生活を開始する。数センチほどの小さな一つの個虫から出芽する無性生殖で

発見の歴史もさることながら、風変わりな生態に焦点を当てて周年展示を続けているイラモは、白浜水族館を代表する動物の一つといえる。ぜひ、この動物を見に来て覚えてほしい。(京都大学准教授)